

今年最後の例会は、第十三巻。始まったばかりの建武新政がもろくも崩れていくところで。幕府の滅亡で失脚した西園寺氏が北条残党と仕組んだ後醍醐天皇暗殺陰謀というおぞましい事件の発覚から、中先代の乱、護良親王の惨殺、足利尊氏の鎌倉占拠と急転回する歴史を、息をのむ思いで読み終わりました。席を移した忘年会で、来年初の旅は、宗像大社から博多への一泊と決まりました。

◇この日の輪読箇所は次の通りです。

(二) 藤房卿遁世の事

諫言容れられず (P293～298 一部略)

万里小路藤房は、民の費えを顧みない大内裏造宮、官人のモラル低下、恩賞の不公平などを挙げて、後醍醐天皇の面前で、失政を厳しく批判した。これまでも繰り返した諫言だったが、容れられないので、退任を決意する。

天皇、忠臣の隠遁を後悔 (P300～303)

藤房は、天皇の石清水八幡行幸に供奉した直後、岩倉で出家。天皇は、藤房の父、宣房に連れ戻しを命じた。しかし、宣房が急行した岩倉の草庵はもぬけの殻で、障子に世を捨てる決意を示す歌と頌が書き残されていた。

(三) 北山殿御陰謀の事

後醍醐天皇暗殺計画 (P305～307)

幕府の時代、関東申次として破格の栄達を遂げていた西園寺氏の当主、大納言公宗は再起を期し、北条高時の弟泰家(時興)を抱き込んで、後醍醐天皇の暗殺と北条残党の一斉蜂起を計画、自邸の北山荘に天皇を陥れる仕掛けを講じて、紅葉狩りに招いた。

陰謀の暴露 (P307～311)

西園寺邸に向かう途中の天皇に、公宗の弟、西園寺中納言公重が兄らの陰謀を急報、御所に引き返した天皇は、直ちに首謀者の逮捕を命じた。公宗は「西園寺家の栄達を嫉んだ公家らの讒言。調べていただければ無実は分かる」と弁明した。同時に西園寺邸の搜索も行われたが、共犯と名指された橋本中将季経は取り逃がした。

公宗の斬首 (P311～315)

取り調べの結果、公宗は出雲配流と決まった。移送警

固を担当する名和長年は、輿に乗せようとした時、上司が「早や」と命じたのを「殺せ」と聞き違え、その場で公宗の首を落した。

※西園寺事件の真相 当時の官僚、小槻匡遠の日記によると公宗の逮捕は建武2年(1335)6月22日。公宗の舅、日野資名父子も共犯。26日に定まった罪名は「奉太上天皇旨 謀危国家」。当時の太上天皇は後伏見法皇だから持明院統も絡む陰謀の可能性もある。

(四) 中先代の事 (五) 兵部卿親王を害し奉る事

北条氏、鎌倉を奪取 (P321～326)

後醍醐天皇暗殺未遂事件の翌月、北条高時の遺児、時行が信濃で挙兵、北条残党やシンパを糾合して大軍で鎌倉を襲った。成良親王を奉じて下向していた足利直義は鎌倉を脱出、その際、幽閉していた護良親王を「足利に終始敵する者」として部下に殺させた。

(七) 足利殿東国下向の事

尊氏、関東管領権を取得 (P333～335)

時行の鎌倉奪取に驚いた朝廷は、足利尊氏に討伐を命じた。尊氏は、征夷将軍への任命と、恩賞授与権を含む東八国管領を要求。征夷将軍は平定後としたが、関東管領を認めただけで、尊氏は直ちに攻撃した。

(八) 相模次郎時行滅亡の事

尊氏、中先代の乱を平定 (P335～341)

尊氏軍は東海道を破竹の勢いで進軍。時行側は、大仏殿の倒壊で死傷者を出す不運もあって敗れ、鎌倉を明渡した。尊氏の武威は急速に高まった。

第15巻輪読予定ページ

(2020年2月17日)

- 1) 433 義貞朝臣～436 待ち明かす
- 2) 436 坂本に～440 下知せられける
- 3) 441 栗生、篠塚～444 七千三百人なり
- 4) 451 三井寺の～454 なかりけり
- 5) 454 さる程に～458 云ふ事なし
- 6) 471 楠、山門へ～475 上りける
- 7) 476 将軍、湊川へ～481 引き給ふ
- 8) 481 千度百度～485 愚かなれ
- 9) 491 さても、将軍～495 おびたし
- 10) 496 少弐が城～500 なかりけり
- 11) 500 両軍相挑んで～504 靡きにけり